

1人1台端末の活用による実践事例

(特別支援学校)

学校名	岡山県健康の森学園支援学校	実践者名	長谷 雄也
実践場面 (教科、領域、行事等)	生活単元学習（交流学习）		
単元・題材名	交流学习の事前学習・準備をしよう		
学習目標・ねらい	・ 普段の作業学習を客観的に振り返り、他者に手順やコツを分かりやすく伝えられる方法を、教師と一緒に考えて自分なりに表現する。 ・ 自分で作ったスライドを頼りに、自信をもって作業の説明をする。		
対象の児童 生徒の実態	・ 書字の困難さとそれに起因する自己効力感およびコンピテンスの低さ。 ・ 興味の偏りはあるが、有意語を話し、ほぼ適切に教師とコミュニケーションをとることができる。 ・ タブレット端末（以下、「iPad」とする。）の操作は好きだが、自分でアプリを活用してプレゼンテーション等を行った経験はない。 ・ 自発的に他者の気持ちを慮ることは少ないが、教師の働き掛けを受ければ、可能な場合もある。 ・ したくない活動に対して、因果関係の無い解決困難な言い訳を考えて主張したり、人や物に当たって苛立ちを表出したりする。		
活用の概要（使用アプリ名を含む） ※写真も掲載する			

1. 交流学习の事前学習

- (ア) 交流学习の日程や内容、目標および役割を確認する。
- (イ) 「説明係」の仕事を担当することが決定。
- ・ 関心を引くことができるように、iPad を操作できることを強調して伝えた。

2. 交流学习の準備

- (ア) 作業の手順やコツを整理し、何をどの順番で伝えるかを教師と相談する。
- ・ 課題別学習の時間や余暇を使って、初めてほだ木運びをする人たちに対して、何を伝えるべきか、どのように伝えるかを教師と相談した。
 - ・ 普段の作業学習中は細かく意識していないことまで、主体的に振り返るようにした。
 - ・ 実際にスライドを作る前に、どのようなイラストや文、アニメーションを用いるのかを決め、手書きの下書きを教師と一緒に作成した。
- (イ) iPad アプリ（「iMovie」と「Keynote」）を操作してスライド作成。
- ・ 上記で作成した下書きを基にして、動画を編集したり、スライドを作成したりした。
 - ・ 台本を用意し、アニメーションやスライド操作と合わせて、実際に説明を読み上げる練習をした。

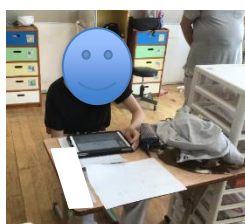
3. 交流学习本番

- (ア) スライドを用いて「作業説明係」の仕事をやリ遂げる！
- ・ 練習してきた通りに、スライドを操作したり台本を読んだりして、交流相手校の生徒にほだ木運びの説明をした。



ビデオでどんな運び方を
していましたでしょうか
かんがえてみましょう。

実際のスライド



作成中の様子



説明中の様子

活用のポイント・改善策等

〈活用のポイント〉

【治療教育的アプローチとして】

- ・ 普段行っている作業学習（ほだ木運び）を、0ベースから始める他者の視点に立つことで、客観的に振り返ることができた。
- ・ 何を伝えるべきなのか、どうすれば伝わりやすいのか、相手の気持ちを推し量る貴重な経験になった。
- ・ 日本語の構成を自分で考えたり、教師と相談したりすることで国語的な技能を高めるなど、「合わせた指導」として幅広い教科を網羅した学習を行うことができた。

【機能代替アプローチとして】

- ・ 書字障害による困難さを代替するツールとしての ICT 機器の活用により、これまでうまくいわずに自信を無くしてしまっていた書字の困難さを克服し、自分の思い通りに表現できる喜びを感じることができた。（本生徒の自立活動における中心課題への介入）
- ・ 自分が作ったスライドで説明するという、「特別感」に由来する自信をもって発表することができたことで、自己効力感とコンピテンスを高めることができた。

【プログラミング教育の視点から】

- ・ どのように伝えたいか（★目的）を基に用いたい表現方法（★手段）を決め、用いたい表現方法（★手段）に対して、どのように操作したら良いのか（★方法）を具体的に考え、実行するというプロセスを繰り返すことで、プログラミング教育の側面からも価値のある学習機会となった。

〈改善点〉

- ・ 生徒の実態として、コミュニケーションを細かくとることができる生徒であったこと、元々 iPad の操作が好きな生徒であったことが本実践の背景としてあり、特別支援学校の多様な実態の児童生徒には、いつも用いることができる訳ではないという点。
 - 実態に合う場合は上記のように実践する。
 - 言語や iPad の操作、検索力、心理面の安定性など、実態に合わせて、完成までに求めるレベルを調節したり、教師が介入する度合いを増やしたりするなどの調整を行う。